

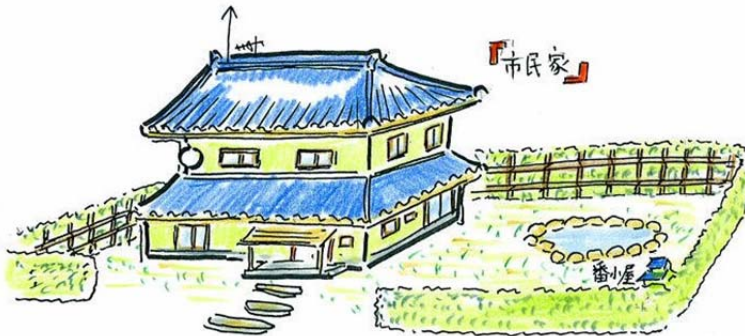
◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆

これまでのあらすじ

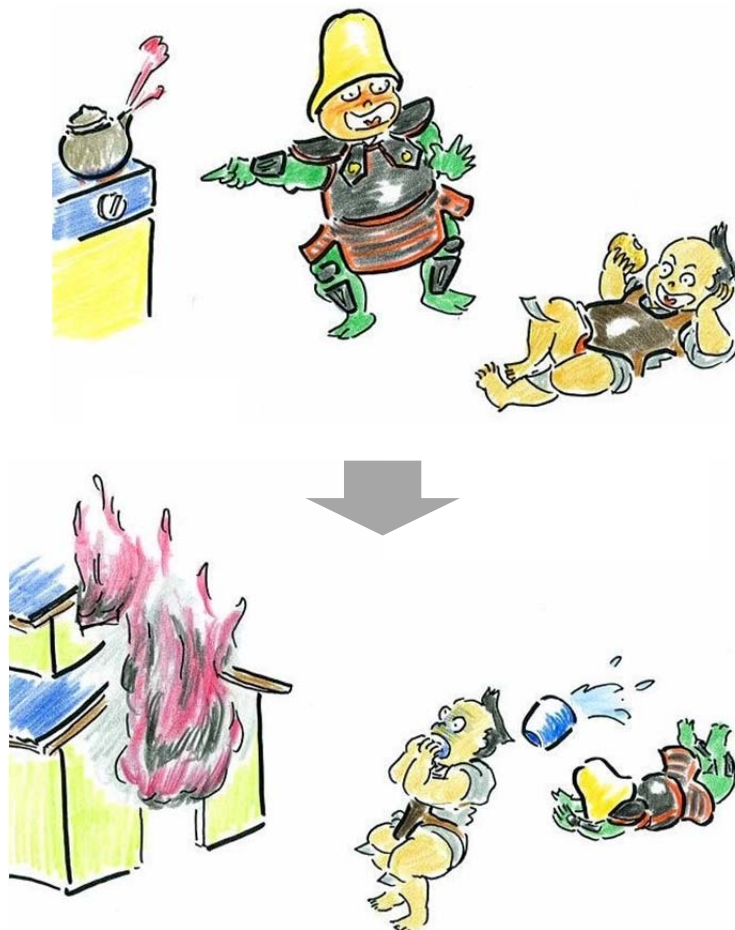
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の^{ちゅうげん}中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

点得幼稚園^{てんとく}の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだあい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.31

「旦那様。出世兜ってあるじゃねえですか？」

「五月人形の兜かい？あれは勇ましいのお。」

「あれは武将様の兜でやしよ？でも旦那様、何百年も前の武将の兜を飾って
何かご利益があるんですかい？」



「これこれ、無粋なことを言うものじゃないよ。これだから市民様のところ
の支援主従はと馬鹿にされるのじゃ。」

「ど、どこのどいつが馬鹿にしゃがるんですかい？あっしがひとつ走り行って懲らしめてやりませあ！」

「馬鹿を言うんじゃない。あれはな、出世兜といってな。ほれ、主様が子供の頃の出世兜・・・これはな、源氏の大將が着用した兜を模したものじゃ。」

「源氏？・・・あの源九郎義経様とかですかい？」

「おっ？源九郎と言うか！なかなか詳しいではないか。」

「へっ、へへ・・・そ、それほどでもないですよ。」



「ほかに何を知っておる？」

「あ、あれでしょ・・・倶利伽羅峠の戦いでしょ？」

「惜しいのお、あれは木曾殿。源義仲様の話じゃな。」

「そ、そうでさ。あっしが言いたいのは義仲様の倶利伽羅峠の戦に、馳せ参じた義経様が角に縛った松明に火を付けた牛に跨り、ヒヨドリ越えの逆落としてやつでしょ？」

「・・・もしもし。」

「な、なんでやす？あってるでやしよ？」

「そう自慢げに言われると拙者の方の自信が揺らぐわい！」

「ま、まだ続けやすかい？」

「結構じゃ。」

「・・・結構と言われますのは・・・もっと続けてみよということすな。」

と困惑顔の拙者をよそにご助は

「倶利伽羅峠から命からがら逃れた平家の一党、船に乗り込むや強風のなか河北潟へと漕ぎ出した。」とあらぬ方向へと話を進め

「返せ返せと逃げる平氏を追ってただ一騎、渦の中へと駒を進める那須与一
〜と、あれ？旦那様いかがしやした？」

「馬鹿馬鹿しゅうて聞いておれぬわい。」と拙者があきれて言うと



「ですが旦那様あれでやすね。木曾殿の火牛の計ってんですかい？あれは牛
殿も熱かったでしょうな。」とご助

「そりゃあ熱かったじゃろうな。暴れる牛に平家の大軍が先を争って倶利伽
羅の谷に落ちていったというからのお。それがどうしたのじゃ？」と拙者が聞
くと

「い、いえね、実は今夜が満願なんでさ。あの熱さも、もう一日我慢すれば・・・」

と答えるご助。

「今夜が満願？なんの満願じゃ？」

「へ、へへへ・・・そ、そりゃあ言えねえですよ。」と頭を掻くご助の額の

小さな火傷を拙者は見逃さなかった。



その晩のこと。

時刻は丑の刻（午前1時過ぎ）、隣の中間部屋で何やら『ガサガサ』という

音がしていたかと思うと、ご助が外出する気配を感じた拙者は

『この夜分にどこへ行く気か?』とその後を追ったのじゃった。

後をつけられておるとは気づかぬご助は、真夜中の道を鶴間坂（小立野）を下りきった古い神社の参道へと



「こ、この真夜中にこのような処で何をしようというのじゃ。」と拙者が辺りをうかがっておると、いつの間に着替えたのか白装束のご助は、頭に逆さにした五徳を乗せると、その足に付けた洋蠟燭に火をつけたのじゃった。

「こ、これは?!」

蠟燭の炎に照らされたご助の顔が悪鬼の形相に・・・



「うっうっうっ、丑の刻参りか！」

丑の刻に呪いを掛けたい相手に見立てた藁人形に五寸釘を打つ。七日の満願を迎えば呪った相手に災いをもたらすという『丑の刻参り』じゃ！

ご助の奴、拙者を呪っておるのか？

こ、今晚が満願じゃと言うておったの？

こ、これはどうしても止めねば！

そうこう考えておるうちに何やら白いものを手に持ったご助が社の方へと走り出した。

「ま、ま、満願にさせてたまるかっ！ま、待てえご助！」と拙者はご助目掛けて大声をあげ、駆け出しておったのじゃった。

突然の拙者の出現に

「だっ、旦那様！ああっ、満願があ・・・」と悲痛な叫びをあげ、その場へたりこんだご助を見据え

「お、お、おのれという奴は！丑の刻参りで拙者を呪うつもりか！」と叱りつけたのじゃった。

「丑の刻参り？なんですかいそれは？あーあ、あっしの満願の邪魔しねえでくたせえよ。また最初からじゃねえですかい。」ととぼけたことを

「き、貴さまのその恰好、丑の刻参りでのうて何じゃというのじゃ。それにその手にした藁人形・・・」と言ってご助の手を見れば、ティッシュを裂いた沢山の『コヨリ』が

「わ、藁人形・・・、コヨリ？」



「そーですよ。お百度ですよ。あーあ、今日で七日の満願だったのに。何で邪魔するかなあ？おまけに丑の刻参りってのは何ですかい？もっと良いお参りでもあるんですかい？」と拙者をなじるご助に

「い、いや、お百度とは知らなんだんじゃ。し、しかし何を願っておったのじゃ？」

「給金ですよ給金。もっと給金が上がりますようにってお百度踏んでたんでさ。」

「さ、さようか・・・」と答えた拙者は、ご助のお百度を台無しにしてしまった負い目もあり、

「そ、そちの願いをかなえて遣わす。来月から給金を1分（5000円か？）上げて遣わす。」と告げたのじゃった。

「ほ、本当ですかい？本当に本当ですかい？」と大喜びで飛び上がるご助の懐から カチン と何かが参道に・・・

「うん？」と見とがめた拙者の目に映ったのは

金槌に五寸釘、そして藁人形じゃった。その藁人形の胸元には『しえ・・・』の字が。

「お、おのれという奴は・・・」と拙者が言い終わらぬうちに駆け出すご助。



「ひいいい・・・だ、旦那様！誤解ですう・・・」と逃げるご助じゃったが、
五徳の洋蠟燭の溶けたロウがポタポタと
「あっつ、あちちい・・・熱い。熱い。」と叫びながら逃げておるうちに
燃え尽きた蠟燭の炎が白装束に燃え移り・・・

「ひいいいいい・・・」と泣き叫ぶご助を見下ろしながら

「因果応報。人を呪わば穴二つじゃな。こたえたかつ。」と叱る拙者に

カチカチ山のタヌキさながら火傷した背中をさすりながらご助は

「へええっ、こたえましてございやす。次に丑の刻参りするときは、和蠟燭
に『防災』の白装束にいたしますう。」と答えるのじゃった。

どこまでも懲りぬ奴よ、と呆れる拙者でござった。



(おわり)